

ピノキオのための試論

——物語を持つ人形の考察——

The Essay for Pinocchio: A study of the doll has story

三井 寛文

〈abstract〉

There are dolls that speak, move their limbs, and have an intimate relationship with people. A doll, which is artificial, and a human being fall in love and become a couple or create a parent-child relationship. Such a relationship is sometimes regarded as deviant. This paper analyzes the relationship between a doll that seems to have life and an individual without assuming that the relationship is deviant. In the interpretation based on existing magic theory, a doll is regarded as something that is infused with life from human beings. The interpretation integrates a doll with life into a human but segregates the existence of human life from the existence of a material doll. Such interpretation treats the doll as material, not as human. Therefore, it is not possible to comprehend the intimate relationship between a doll and a human. Instead of resolving the division between human and non-human material, this paper focuses on the “updated” relationship between doll and world, and considers that doll life is infused with life from a human being.

目次

序

第1章 物語を持つ人形

第2章 人形の呪術的解体

第3章 ヒトでもなく、モノでもなく

結

工業ロボットはともかく／少なくとも愛玩用のアンドロイドやガイノイドは／功利主義や実用主義とは無縁の存在だわ
なぜ彼らは人の形／それも人体の理想形を模して作られる必要があったのか／人間はなぜこうまでして／自分の似姿を作りたがるのかしらね⁽¹⁾

しかしこの世には、かつて存在しなかったものさえも、存在してしまっ
てはいないかね。たとえば歴史だ。あるいは物語と言っても良い。ただ
の物質に命を与えるそれは力で、物質化する情報だ。[伊藤／円
城 2014：467]

序

カルロ・コッローディの『ピノキオの冒険』⁽²⁾は、木で作られた人形の少年ピノキオが様々な苦難を乗り越え、遂には人間の少年になるまでを描いた作品で、日本でも絵本やアニメーション映画を通して、広く知られている[コッローディ 2003]。この小論で取り上げるのは、ピノキオのように生きている、あるいはそう考えられる人形であり、ここではこうした人形を物語を持つ人形と呼ぶ。

文化人類学や民俗学の著作を紐解けば、人形に関する様々な記述を見つけ

ることができる。祭礼や呪術に用いられる人形、玩具や民芸品としての人形、人形の登場する伝承など、「ヒトの形を模して作られたモノ」としての人形は珍しくない。膨大な記述とは対照的に、人形についての体系的な研究はほとんどなされていない。この論考の主題である物語を持つ人形となれば、尚更である。

後述するジェームズ・フレーザーの呪術論に顕著のように、既存の研究では人形が引き起こすとされる不可解な現象は、祭礼や呪術といったシステムの内部で、祭司や呪術師のようなシステムの管理者から与えられる影響に基づくものであると解釈されてきた [フレーザー 1994]。しかし、こうした解釈はモノとヒトとの二項対立を強調することで、物語を持つ人形と世界の間にある気紛れな関係を見難くしてしまう。

本論では物語を持つ人形を主題に、既存の解釈を再考した上で、ヒトとモノとに解体することからは決して見えてくることのない、人形と人々の関係を示すこととしたい。

第1章 物語を持つ人形

本章では、物語を持つ人形の事例を提示する。具体的には、人間のように言葉を発し、動き、人々と特別な関係——親子、恋人、夫婦等——を持つ人形である。先に述べたように、この小論ではヒトとモノという二項対立に組み込まれている人形を問題としている。従って、以下の事例は人々と人形の関係に焦点を絞っている⁽³⁾。

i. 遊女の人形

次に引く話は江戸川乱歩がエッセイに取り上げたものである。

「今昔妖談集」という本に、これとよく似た話が出ている。

「いつの頃よりか、京大阪の在番の歴々、もて遊びとすることもあり、大阪竹田山本の類の細工人の工夫にて、女の人形を人ほどにこしらえ

(中略) ぜんまいからくりにて、手足を引きしめ自由に動くこと生ける人のごとし」菅谷という武士が、江戸の遊女「白梅」というものに似せて、この人形を造らせ、ある夜、その人形とたわむれている時「いかに白梅、そなたはわれをかあいく思い給うか」と尋ねてみると、人形口を動かして「いかにも、いとしゅうこそ」と答えた。

驚いた菅谷は、きつね、たぬきの業ならんと、枕許のわき差し取って「白梅」の人形を真二つにしてしまった。

これは京都の出来事だが、ちょうどそれと時を同じゅうして、江戸吉原の本物の白梅太夫は、初回の客に斬り殺されていた（初回の客のことゆえ、殺害の理由は少しもなかったのだ）。[江戸川 1997：196-197]

物集高見の『広文庫』第15冊には、同じく「今昔妖談集」を出典として、より詳細な記述がある。それによれば、これは「延享三年 [1746年：引用者注] 七月五日の夜八つ時頃」に起こった出来事であり、事件後、菅谷は心を入れ替え、仏門に入って、白梅大夫を供養して過ごしたとある〔物集 1918：30〕⁽⁴⁾。

ここでは白梅大夫という遊女をモデルに製作された人形が、菅谷の問いかけに対して、返答している。いくら「ぜんまいからくりにて、手足を引きしめ自由に動くこと生ける人のごとし」であっても、言葉を発し、菅谷の気紛れとも言える問いに答えることができたとは考え難い。逆にそうした機構を有していたのならば、切り捨てることもなかっただろう。つまり、この人形には予期せずして生命が宿っていたのである。

そして、結末では人形の破壊と同時に、理由もなく白梅大夫が斬り殺されることによって、人形とモデルである白梅大夫との間に、なんらかの関係があったということが暗示されているのである。

ii. 娘の人形

次に引くのは哲学者のデカルトにまつわる伝説である。

哲学者ルネ・デカルトには奇妙な噂がつきまとっていた。彼はつねづねフランシーヌという名の、見たところ五歳位の少女の人形をトランクに入れて肌身離さず持ち歩いており、クリスティーナ女王の招きに応じて海路スウェーデンに渡るときもこの人形を船室に持ち込んで、さながら生ける者を相手にするように話しかけたり身の回りの世話を焼いたりしていたというのである。たまたまドアの外でささやき声を耳にとめた船長がデカルトの留守に船室を調べてみると、そこには薄気味の悪い少女人形がガラスの眼玉をぱっちり開いて寝かせてられているではないか。と、折から荒天が起って船は激しくローリングしはじめ、あわや沈没するかに見えた。これこそはあの悪魔の作った人形の呪いにちがいないとばかり、船長が哲学者の船室からフランシーヌを持ち出して海中に投げ捨てると、嵐は嘘のようにピタリと風いだという。[種村 1987：97]

デカルトには五歳で亡くなったフランシーヌという娘がいたという。つまり、これは単にデカルトが少女の人形を所有していたということではなく、亡き娘の代わりの人形を作って、あるいは亡き娘を人形として蘇らせて連れていたという伝説なのである。

種村季弘によれば「少女人形フランシーヌの实在を信じている例も絶無ではないとしても、大方のデカルト伝記作者は埒もない巷間の伝説として受け取っているようだ。しかし『方法叙説』第五部において動物を一個の自動機械として論じたデカルトが、かりに人間そっくりの自動人形を作ったとしても、当時の人びとには当然のことにように思われたのではないか」としている [種村 1987：98]。

iii. 息子の人形

昭和37年（1962年）10月6日の朝日新聞の人形について書かれた小林秀雄のエッセイが掲載されている。

或る時、大阪行の急行の食堂車で、遅い晩飯を食べていた。四人掛け

のテーブルに、私は一人で坐っていたが、やがて、前の空席に、六十恰好の、上品な老人夫婦が腰をおろした。

細君の方は、小脇に何かを抱えてはいつて来て私の向いの席に着いたのだが、袖の影から現れたのは、横抱きにされた、おやと思う程大きな人形であった。人形は、背広を着、ネクタイをしめ、外套を羽織って、外套と同じ縞柄の烏打帽子を被っていた。着附の方は未だ新しかったが、顔の方は、もうすっかり垢染みてテラテラしていた。眼元もどんよりと濁り、唇の色も褪せていた。何かの拍子に、人形は帽子を落し、これも薄汚くなった丸坊主を出した。

細君が目くばせすると、夫は、床から帽子を拾い上げ、私の目が会うと、ちょっと会釈して、車窓の釘に掛けたが、それは、子供連れで失礼とでも言いたげなこなしであった。

もはや、明らかなことである。人形は息子に違いない。それも、人形の顔から判断すれば、よほど以前の事である。一人息子は戦争で死んだのであろうか。夫は妻の乱心を鎮めるために、彼女に人形を当てがったが、以来、二度と正気には還らぬのを、こうして連れて歩いている。多分そんな事か、と私は思った。

夫は旅なれた様子で、ボーイに何かと注文していたが、今は、おだやかな顔でビールを飲んでいる。妻は、はこばれたスープを一匙すくっては、まず人形の口元に持って行き、自分の口に入れる。それを繰返している [小林 2004 : 168-169]

エッセイは「異様な会食は、極く当たり前に、静かに、敢て言えば、和やかに終わったのだが、もし、誰かが、人形について余計な発言でもしたら、どうなっていたであろうか。私はそんな事を思った」と結ばれているように、小林は老夫婦に人形の事を尋ねたわけではない [小林 2004 : 170]。つまり、ここに書かれているのは小林の観察と推理、そして想像に基づいた記述である。しかし、ここでは小林の見た人形として、これを取り上げる。

小林の描写からして、人形はオーダーメイドというわけではないようであ

る。また外見に関しては、汚い人形でしかなかった。そんな人形にまだ新しい服を与え、大事に食事までさせている。この人形が老夫婦、とりわけ老婦人にとって大切な存在であることがわかる。

iv. もの言う人形

以下は柴田宵曲が井原西鶴の『男色大鑑』から取り上げた話を要約したものである。

人形がもの言う話は「男色大鑑」にある。人形作りが一心こめて作った人形を、店の看板に立てて置いたところ、時々身を動かすのみならず、芝居帰りの太夫達に目を付け、夜毎にその名を呼ぶようになった。自分の作ったものながら、恐ろしく、河原に流したことも二三度あったが、いつの間にか帰って来る。この事を手紙に書いて若衆の集まった宿へ持たせてやると、成程夜中に役者の名を呼ぶ。箱から出して言葉をかければうなずき、捨盃を与えた後、諸見物の思い入れ数多で、そなたの願いは叶わぬと諭したら、それきり目もやらなくなった。[柴田 1997：201]

この話の人形は誰かの代役を務めているわけでもなく、また身を動かして喋るようにと作られたわけでもない。人形作り自身が「恐ろしく、河原に流したことも二三度あった」ほどなのだから、このような人形ができあがるとは思ってもみなかったはずだ。つまり、この人形は予期せずして生まれてしまった存在だと言えるだろう。

v. 左甚五郎の作った藁人形

日光東照宮の眠り猫等で知られる伝説的な大工、左甚五郎には次のような伝説がある。

天草地方には次のような昔話が伝えられている。左甚五郎が城を造る際に、期限内までに完成させることが危ぶまれたため、多くの藁人形を

作って、生命を吹き込み、その人形の加勢によって、めでたく城を完成させた。しかし、その藁人形の始末に困って、川に捨てようとしたところ、人形たちはこれからさきなにを食べたらよいのかと尋ねた。左甚五郎が人の尻を食えという、藁人形は河童になったという。すなわち、妖怪の河童が左甚五郎の手によるとする、河童起源譚である。[川村 1991：77]

ここでは人足の代わりとするために、左甚五郎が意図して藁人形に生命を吹き込んだものとされている。そのため、藁人形は働き、ヒトのように食事に困り、遂には河童という妖怪になったのである。

vi. 現代のオートマタ

フランスのオートマタ（自動人形）職人レナード・ボアレットの作ったオートマタについて、竹下節子は次のような話を取り上げている。

すべての動きは正確無比だ、長靴をはいた猫は、マスクを顔の前にもっていくが、マスクの目の穴に正確に両眼が当たる。バイオリニストの弓は正確に弦の上をこするし、曲の終わりに弓を優雅にバイオリンから離すバイオリニストもいる。あまりにも生き生きしているので、ある婦人客などは、ボアレットがネジを巻く前にもう、動くのを見たと言い張ったこともある。[竹下 2001：55]

別の個所では「ある子供が「[ボアレットの：引用者注] 店の中で掃除機をかけているオートマタも見た」と友達に言い張っているのを耳にしたこともある」とも記している [竹下 2001：53-54]。

御伽噺や伝説に出てくる人形とは違い、ボアレットのオートマタは実在する商品である。ボアレットの店を訪れる人々は、陳列されたオートマタが彼の作品であることを知っている。それにもかかわらず、ある婦人客や子供のように、作品であるはずのオートマタに生命を見出すのである。

vii. デイジョンのノートルダム寺院のジャックマール

澁澤龍彦は著作の中でデイジョンのノートルダム寺院にあるジャックマール（寺院の時計の鐘を突く金属製の人形）についてのエピソードを取り上げている。

おもしろいのは、寺院の塔を仰ぎ見る市民たちが、ひとりぼっちで塔の上に立っているジャックマールを気の毒がって、これに仲間をつくってやろうと考えたということだ。たとえば、名高いデイジョンのノートルダム寺院のジャックマールは、こうして市民から三人の家族をつくってもらったのである。

まず一六五〇年、それまで独身だったジャックマールに妻があたえられた。妻の名はジャックリーヌという。次に一七一五年、市民の努力によって、ジャックリノという名前の息子が誕生した。最後に一八八五年、ジャックリネットという名前の娘がつくられて、とうとう家族は四人になった。[澁澤 1980：203]

ジャックマールは設計された機構に基づいて動作しているにすぎない。鐘を突く人形に対して、デイジョンの市民はまるで友人であるかのようにジャックマールを気の毒がって家族の人形を与えた。家族を与えるに足る存在として、ジャックマールは市民に認められていたのである。

viii. ダッチワイフの家族

次に引くのは現代日本の事例である。

ある時テレビの深夜番組で、ダッチワイフの家族と暮らす独身男性の日常というのを見たが、彼が妻と呼ぶ人形を連れて出した先で次々と直面する困難が面白おかしく取り上げられていた。道で手を上げてもタクシーは止まらず、予約してあったレストランでの食事でも断られる。ラブドールの専門店で男は新製品の購入を勧められるが、妻が許してくれな

いのではないかと思ひ悩み逡巡する。しかし、人形の女性を愛する彼は、単なる異常者なのだろうか。[吉田 2011 : 127]

ダッチワイフは性的な目的で使用される女性の人形であり、男性のように家族として生活し、街を連れ歩くために作られたものではない。タクシーのドライバーやレストランの従業員が男性とダッチワイフの妻を拒絶したように、そうした男性の行動は「異常者」と見做されることが多いかもしれない。しかし、本論文ではそのような見解を取ることなく、男性にとっての生命を持つ存在としてのダッチワイフに着目する。

ix. フランケンシュタインの怪物

1818年に出版されたメアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』に登場する怪物は、一般にフランケンシュタインと呼ばれ、後世の様々な作品に登場している [シェリー 2011]。しかし、正確にはフランケンシュタインとは怪物の創造主の名であり、怪物そのものには名前は与えられていない。

フランケンシュタインは死体を繋ぎ合わせて作った人体に、彼だけが知る「生命の通わぬ物質に生命を吹き込む」方法によって、生命を与える [シェリー 2011 : 96]。生み出されたのが怪物である。

死体を材料としていることで、他の人形とは印象が異なっているものの、フランケンシュタインは死者を蘇生したわけではなく、新たに自らが作り出した怪物に生命を与えたのであるから、これも生命を与えられた人形と捉えることができる。

x. 自動人形オリンピア

ホフマンの短編小説「砂男」では、自動人形オリンピアに恋する青年ナタナエルの姿が描かれている [ホフマン 1984]。オリンピアは必ずしも完璧な自動人形として描かれてはいない。ナタナエルの友人ジークムントはオリンピアを次のように評している。

「変だとは思わないかね、あのオリンピアについちゃあ不思議とみんなの意見が一致するんだな。つまり——気を悪くしないでくれよ——あの女は妙にこわばっていて、魂のない生きものみたいだって点でだね。からだつきも顔かたちもみごとなものだ。それは認めるよ！——美人ということになるかもしれん。ただし、目に生气ってものがあつたらの話だな。あの目がものを見ているかどうか怪しいぜ。歩きぶりにしたって奇妙にぎこちない。動作、物腰がぜんまい仕掛けみたいじゃないか。ピアノを弾くにしても歌をうたうにしても、いやになるほど正確一点ばり、機械的な一本調子だとは思わんかね。この点、踊りにしたってそうだった。まったくうす気味悪いったらありゃあしない。あのオリンピアとはだれも関わりをもちたくないというんだな。なにか生きもののふりをしているだけのようだしね。きっとそれ相応のいわくがあるにちがいないぜ」[ホフマン 1984：196-197]。

ところが、ナタナエルはジークムントの言葉を拒絶して、オリンピアに恋することを辞めない。それほどまでにナタナエルにとってオリンピアは恋する対象だったのである。ナタナエルにこうして想いを寄せられる、オリンピアは生きた存在だったと考えられる。

ここでは10の事例を提示した。以降、適宜これらの事例を用いながら、物語を持つ人形と人々の関係について考察を進めることとする。

第2章 人形の呪術的解体

人形が生きている、あるいはそう考えられるということは、先に見た例からも明らかである。科学的合理主義に照らしてみた場合、こうした考えは不可解に感じられる。こうした非科学的な物語を持つ人形についての考えを理解するために、たびたび用いられるのが呪術論である。本章ではジェームズ・フレーザーの呪術論等を用いて、物語を持つ人形を呪術的に解釈する。

ジェームズ・フレーザーは『金枝篇』の中で、呪術に次のような法則性が存在することを指摘した。

呪術はどのようなものの考え方に根ざしたものなのか、その原理を分析すれば、次の二点に帰着するようだ。すなわち、一つは、似たものは似たものを生み出す、いい換えれば、結果はその原因に似るということだ。もう一つは、かつて互いに接触していたものは、その後、物理的な接触がなくなったのちも、引き続きある距離をおきながら互いに作用しあうということだ。前者を「類似の法則」と呼び、後者を「接触の法則」あるいは「感染の法則」と呼んでもよい。[フレーザー 1994 : 60]

ここでフレーザーが指摘しているのは、科学的な因果関係とは全く異なった、呪術的な世界観における関係である。そして、そうした関係は先に提示した物語を持つ人形にも当てはめることができる。

まずは白梅大夫の人形(i)を取り上げる。白梅大夫の人形の話では、ニヶ所でモデルである白梅大夫と人形との間に存在する特殊な関係が示されている。第一に菅谷が人形に「いかに白梅、そなたはわれをかあいしく思い給うか」と尋ね、それに対して人形が「いかにも、いとしゅうこそ」と答えた場面である。ここで菅谷は「白梅」と呼びかけ、人形も「白梅」としてその問いに答えているのである。つまり、人形はモデルの白梅大夫として振舞っていたということになる。

第二はその結末である。「きつね、たぬきの業ならんと」思った菅谷によって人形は両断される。ときを同じくして、遠く離れた江戸吉原にいた白梅大夫も初回の客によって殺されてしまう。江戸川乱歩による要約は、ここに存在する因果関係を的確に捉えて強調している。つまり、これをただの偶然として捉えるのではなく、菅谷が人形を斬ったことを原因として、モデルである白梅大夫の死という結果が起きたとされている。

白梅大夫をモデルとして作られた人形は、白梅大夫と同じように喋り動くことができたために、菅谷の問いに白梅大夫として答えた。逆に人形の破壊

がモデルである白梅大夫に死をもたらしした。この関係は「似たものは似たものを生み出す」という類似の法則そのものである。

フランシーヌの人形（ii）についても類似の法則で説明できる。この場合は亡き娘であるフランシーヌと彼女をモデルとした人形との間に関係が存在して、フランシーヌが喋れたように人形も喋ることができる。すなわち、人形はフランシーヌの生命を与えられ、フランシーヌの代わりになるのである。

老夫人が連れていた人形（iii）の場合、人形の外見が息子に似ていたかはわからないが、その人形には老婦人の息子の存在が投影されており、類似の法則によって理解することができる。

これらの例では人形とモデルの間には密接な関係が存在し、ときにその関係は両者の生死にも及ぶ。つまり、人形とモデルが生命を共有する、あるいはモデルが既に死んでいる場合、モデルの生命が人形に吹き込まれていると考えられる。

次にもの言う人形（iv）を見る。この話の場合、白梅大夫の人形やフランシーヌの人形の場合とは違って、モデルの存在が明示されていない。また、人形は誰かの代わりを務めているわけでもない。この人形を解釈するにあたって重要なのが「人形作りが一心こめて作った」ということである。

小松和彦は器物の妖怪を扱った論考の中で、中世の庶民の持つ職人のイメージについて次のように述べている。

中世の庶民は、ある意味で技術者＝商人であるとともに呪術＝宗教者でもあるようなびととの間でものを交換することで、彼らの生活を豊かにしていたのである。

とするならば、庶民は、職人に対するイメージと同様に、そうした職人たちが彼らの信じる神仏の力を借りて製作した物に対して特別なイメージをいだいていたと考えることもできるに違いない。器物は製作されたときから、単なる器物以上のものをその内部に秘めていたのである。[小松 1994b : 340]

器物にはその制作者である職人のイメージが内在されており、それが器物を器物以上のものとしていたのである。こうした考えは人形にも当てはまる。

そもそも人形は人形作りによって作り出されたものである。つまり、両者はフレーザーの言葉を用いれば「かつて互いに接触していたもの」なのである。人形の完成によって、物理的な接触がなくなってから後も、制作者である人形作りからの影響を受けていると、言い換えれば人形作りによって生命を吹き込まれたと考えることができる。この関係は接触の法則によって捉えることができる。左甚五郎の藁人形（v）、またフランケンシュタインの怪物（ix）の場合も同様で、制作者から人形へと生命が吹き込まれているのである。

レナード・ボアレットのオートマタ（vi）については、オートマタという作品と職人の関係に注目しておく必要がある。

オートマタ作りは、専門職の反対で、あらゆる技術のオーケストレーションである。シナリオを書き、デッサンを描き、図面を引き、機械も動力も扱えねばならない。ミニチュア作りの木工も、布染めも裁縫も全部一人で行う。[竹下 2001：52]

竹下が述べているように、オートマタ作りは近代的な分業制度とは異なり、たった一人の職人が一体のオートマタを構成するあらゆる要素と関わりを持っている。すなわち、オートマタと職人との間には強い結びつきが存在している。そして、ボアレットの作品であるオートマタが生命を持つとすれば、それはボアレットが生命を吹き込んだからだ、と、接触の法則に基づいた解釈を行うことが可能である。

また、接触の法則は制作者と人形との間にもみ出されるものではない。ダッチワイフの家族（viii）の場合、大量生産品であるダッチワイフにはモデルや制作者といった関係の強い人間は存在していない。この場合、男性と共に生活するという日常的に接触する状態によって、男性から生命を吹き込まれていると捉えることが可能である。オリンピア（x）の場合には、所有者

に当たる存在に恋人であるナタナエルを置くことで、同様の構図によって理解することができる。つまり、所有者と人形との間の関係にも接触の法則を当てはめることができる。

このように呪術論を用いて、物語を持つ人形を解釈するとき、一様に人形は生命を吹き込まれる器として現れることになる。

折口信夫は「人形の起源」と題された小文で次のように説いている。

大きな人形は、人が中に這入ったのが最初である。次いで人が這入らなくなり、体を露出して其形を作るやうになつた。それがやがて、手で使ふ人形に変化した。人間は隠れてゐる。つまり、元は人形と人間が同じだつたが、次第に分離した。[折口 1996：422]

特撮番組で使用する怪獣の着ぐるみを思い浮かべれば、わかりやすいかもしれない。着ぐるみはそれだけでは動き出すことはない。着ぐるみの中に俳優が入って演じることによって、怪獣は生き生きと動き出すのである。折口の考える人形も同様である。人形は人間を象ったものではなくて、人間を収める器だったのである。

折口と同じく人形を器として捉えた分析に、川村邦光のものがある。

ヒトガタにしろ、さまざまなカタシロにしろ、それらはたんなるイミテーションではなく、生命をもち、動くものとみなされていたといい。道教的・陰陽道の儀礼テクノロジーによって、靈威に満ちたアニマが吹き込まれていたのである。[川村 1991：106]

川村によれば、人形とは「アニマ（生命・靈魂）」を吹き込まれる器である [川村 1991：76]。直接的に人間が入るのではなく、人間がアニマを与えることによって、人形は生命を持つのである。

モデルと生命を共有しているのであれ、制作者あるいは呪術師によって生命を吹き込まれているのであれ、人形はモノであり、生命はヒトから人形に

与えられるのである。つまり、呪術論に基づく解釈では物語を持つ人形は、器としてのモノと生命としてのヒトに解体される。

しかし、こうした解釈は人形と人々の間に因果関係を設定することはできても、人形と人々の間にある特別な関係を捉えることはできない。

第3章 ヒトでもなく、モノでもなく

第2章では、呪術論に基づいて、物語を持つ人形を解釈した。この解釈に従えば、人形が言葉を発し、動くのは、人間から生命を吹き込まれたためであると説明することはできる。しかし、それならば、なぜ男性はダッチワイフを妻とするのか、なぜディジョンの市民はジャックマールに家族を与えたのか。極言すれば、モノでしかないはずの人形となぜ人々は特別な関係を持つのか。この疑問には答えることができない。

本章では呪術の儀礼に用いられる人形の例を引き、こうした消費されるモノとしての人形との比較を通じて、人々と物語を持つ人形の、ヒトとモノに解体することのできない関係を示したい。

最初に引くのは、フレーザーが『金枝篇』の中で類似の法則の例として挙げたものである。

たとえば、オジブウェイ族のインディアンは誰かに危害を加えたいと思ったときは、狙う相手を表す小さな木像をつくり、その像の頭部もしくは心臓部に針を突き刺したり矢を射込んだりする。そうすると、相手の身体はその瞬間に激痛が走ると信じているのだ。[フレーザー 1994：63]

人形を使い、特定の人間に危害を加える呪術の例は他にもある。以下は小松和彦による、いざなぎ流の呪い人形の記述である。

「呪詛の祓い」（普通、これを「取り分け」と呼んでいる）の儀礼にお

いて読み唱える「呪詛の祭文」とは性格を異にする一種の呪文、すなわち「呪詛の読み分け」のなかには、一年の月々でそれぞれの人形の材料が異なっていたらしいことが記されている。

正月は松人形、二月は茅萱人形、三月は桃花人形、四月は麦わら人形、五月は青葉人形、六月は卯の花人形、七月はそおはぎ人形、八月は稲葉人形、九月は菊の花人形、十月はからしな人形、十一月は白紙人形、十二月は氷の人形。そしてこのような人形を作って、「呪い調伏」の場合では、「我は良かれ、人は悪しかれ、その子孫は絶え行け」と地に伏し天を仰いで因縁調伏するというのである。

この人形を責める方法にもいろいろあり、「杣法」という墨壺を使う方法、「天神法」という金床と金槌を使う方法、「針法」という釘や針を使う方法などがもっともよく聞く方法である。たとえば、天神法は金床の上に置かれたひとがた人形を金槌で叩くものであり、杣法は墨糸を弓の弦にして、下に置かれた人形に小さな先の尖った矢をつがえて射かけるものである。[小松 1994a : 195-197]

人形を傷つけることで、モデルである人物に危害を加えるというこれらの呪術は、ちょうど白梅大夫の人形（i）の例で菅谷が行ったことと重なる。意図せずしてではあるが、菅谷は人形を斬り、結果としてモデルの白梅大夫は死んでしまった。こうした関係の中に、フレイザーは類似の法則を見出したのである。

しかし、こうした呪い人形と物語を持つ人形は決定的に異なる点がある。引用にあるように、いざなぎ流では呪い人形の材料が月毎に厳密に定められている。季節の植物や氷といった材料から推測ができるように、人形はあくまで必要に応じて作られていた。また、いざなぎ流とオジブウェイ族のインディアン呪術では、共に人形を儀礼の中で傷つけることで、対象に危害を与えようとする。つまり、人形は一度の儀礼で消費されると考えられる。

呪い人形は人間と生命を共有してはいるかもしれないが、物語を持つ人形として本稿で取り上げたように、人々の間に特別な関係を持つことはない。

つまり、生命を持つというだけでは、人々と特別な関係を持つ理由としては不十分である。

例えば一枚の戸板が修繕された時そこに現れる「更められた新しさ」すなわち更新はそこにはない。戸板の一枚だけが周囲との延長的連続から断ち切れ、連続の中断を以て「引用」され、その抜き抜かれた部分に新しい挿入が、機械的ではなく周囲との関係の再形成として行われる時、並べ直された断片のそれぞれは変身し、そこに現れるモンタージュ効果は関係の更新という点で全的に新しい。そういう新しさは完結した現在形としての新品の世界にはない。[藤田 2003 : 276]

藤田省三が「完結した現在形」と表現しているように、呪い人形は儀礼というシステムに埋め込まれ、他の要素との関係を決定されている。例えば、呪術師と呪い人形の関係は加害者と間接的ではあるが凶器のそれでしかない。そのために呪術師に作られたものなのである。儀礼が完遂されれば、呪い人形はその必要性を失い、処分される。「関係の更新」がなされることはない。

しかし、物語を持つ人形は「完結された現在形」としての存在ではない。ダッチワイフの家族(viii)と暮らす男性を見てみよう。前述のように、本来ダッチワイフは性的な目的で使用される道具である。しかし、男性はダッチワイフを家族として認識し、実際に妻としてダッチワイフを連れて街に出ている。「ラブドールの専門店で男は新製品の購入を勧められるが、妻が許してくれないのではないかと思い悩み逡巡する」というように、妻であるダッチワイフは生命を持った存在として、男性との関係を持っている。

また、妻であるダッチワイフを連れた男性をタクシーの運転手やレストランの従業員は拒絶する。男性とダッチワイフの夫婦という関係を、彼らは認めない。彼らにとって、ダッチワイフは男性の妻ではなく、性的な目的で使用される人形でしかない。彼らは男性とダッチワイフを拒絶することで、ダッチワイフを中心として関係を更新しているのである。

ディジョンのノートルダム寺院にあるジャックマール (vii) には、寺院の鐘を突くという機能が設定されている。人形ではあっても、ジャックマールは鐘や寺院の一部なのである。しかし、ディジョンの市民はジャックマールを、鐘を突く仕掛けとしてではなく、独りであることを気の毒に感じる対象として捉える。鐘を構成する要素ではなく、ジャックマールという隣人と市民の関係に更新されている。だからこそ、ジャックマールには家族が与えられたのである。

老婦人の連れた人形 (iii) は、彼女の息子であった。同行していた夫は妻と息子の関係を認めていたはずだ。この家族と偶然にも同席することになった小林は、完結された関係の外から現れた闖入者とでも表現すべき存在である。しかし、小林は家族に積極的に干渉することなく、人形が同じテーブルに着くことを黙認する。小林は意図せずして、息子としての人形の存在を承認し、人形を中心とした関係を更新させたのである。

以上、更新される関係という観点から物語を持つ人形について考察した。呪術論による解釈では人形の持つ生命の根源を規定することはできても、こうした人形と人々の関係を捉えることはできない。なぜならば、呪術論が本質的に人形をヒトとモノという二項対立図式の中で解体し、契約のような強固な関係を唱えるのに対し、人々との関係の中で人形は酷く気紛れに、ときにヒトであるかのように、ときにモノであるかのように振る舞い、一つの関係に留まることがない。さながらシュレディンガーの猫のように、生と死が重なり合って人形は存在する。そして、そうした人形の在り方はヒトでもなく、モノでもないのである。

ヒトとモノという構図が意味をなさない世界がここにはある。現代社会ではますますヒトとモノの区別が難しくなっている。インターネット等による物理接触を伴わないコミュニケーションや、部分的あるいは全面的に機具によって補助される生活はもはや我々にとって日常である。ヒトやモノといった区別は曖昧になり、人形が生きる世界は広がっていく。この小論で人形たちによって示された観点は、こうした世界を捉えるのに必要なものになると考える。

結

この小論では生きている、あるいはそう考えられる人形を取り上げて、ヒトとモノという二項対立図式によって捉えることのできない人形の在り様について考察した。

呪術論による既存の解釈は人形が人間のように言葉を発し、動くという現象の原因を人間から吹き込まれた生命（ヒト）に還元し、これを区別することによって人形をモノとして捉えることを可能にする。しかし、この解釈では人形と人々の間にある関係を捉えることはできない。

本稿では、藤田省三の議論を援用し、物語を持つ人形は「完結した現在形」としてシステムに埋め込まれた存在ではなく、他者をも含んだ世界の中で関係を更新していく存在として捉えた。こうした観点では、呪術論による解釈が前提としていたヒトとモノという二項対立は意味をなさない。関係によって、人形はヒトのようにも、モノのようにもなる。こうしたヒトとモノとが重ねられたような存在として、ヒトでもなく、モノでもない人形が世界には溢れている。

注

- (1) 2004年公開、押井守 監督・脚本『イノセンス』より引用。
- (2) 大岡玲訳の『新訳 ピノッキオの冒険』を始め、日本では「ピノッキオ」という表記も多いが、ウォルト・ディズニーの映画等によって、広く知られている「ピノキオ」の表記を本稿では用いる。
- (3) 神仏や精霊の影響によって、人形が生命を持つ話も数多い。神像や仏像、また聖人像に関する伝説等がこれに当たる。しかし、この小論の関心はあくまでヒトと人形との関係にあるため、超自然的存在とヒトと人形という三者の関係はここでは取り上げない。
- (4) 近代デジタルライブラリー 広文庫 第15冊
[<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/969109> 2014年10月10日閲覧]

参考文献

伊藤計劃／円城塔

2014『屍者の帝国』河出書房新社（河出文庫）

江戸川乱歩

1997「人形」トマス・ハーディ他『書物の王国7 人形』pp.195-200、国書刊行会

折口信夫

1996「人形の起源」『折口信夫全集 21』pp.422-423、中央公論社

川村邦光

1991「ヒトガタ・カタシロ考」網野善彦他編『音と映像と文字による【大系】日本 歴史と芸能 第十一巻 形代・傀儡・人形』pp.76-109、平凡社

コッローディ、カルロ

2003『新訳 ピノッキオの冒険』大岡玲訳、角川書店（角川文庫）

小林秀雄

2004「人形」『考えるヒント』pp.168-170、文藝春秋（文春文庫）

小松和彦

1994a「式神と呪い——いざなぎ流陰陽道と古代陰陽道——」『憑霊信仰論』pp.183-228、講談社（講談社学術文庫）

1994b「器物の妖怪——付喪神をめぐる——」『憑霊信仰論』pp.326-342、講談社（講談社学術文庫）

シェリー、メアリー

2011『フランケンシュタイン』小林章夫訳、光文社（光文社新訳古典文庫）

柴田宵曲

1997「もののいう人形」トマス・ハーディ他『書物の王国7 人形』pp.201-202、国書刊行会

澁澤龍彦

1980「人形愛の形而上学」『ビブリオテカ澁澤龍彦 IV』pp.194-206、白水社

竹下節子

2001『からくり人形の夢』岩波書店

種村季弘

1987「少女人形フランシース」『怪物の解剖学』pp.95-114、河出書房新社（河出文庫）

藤田省三

2003「新品文化——ピカピカの所与——」『精神的考察』pp.271-280、平凡社（平凡社ライブラリー）

フレーザー、ジェームズ

1994『図説 金枝篇』内田昭一郎・吉岡晶子訳、東京書籍

ホフマン

1984「砂男」『ホフマン短篇集』池内紀訳、pp.147-212、岩波書店（岩波文庫）

物集高見

1918『広文庫 第15冊』広文庫刊行会

吉田司雄

2011「美女と機械、人形と少女」小中千昭・安倍吉俊『ですべら』pp.126-129、徳間書店